

教宣 せぶん

セカンドオピニオン

地位確認訴訟の最終準備書面が、原告である私たちに届けられました。131ページにも及ぶ「力作」です。どぶいたニュースにも書かれています。これを読むと、この訴訟やこのたたかいを支えていただいている方々の熱意と使命感を感じずにはいられません。熟読して12日に備えましょう。

この最終準備書面を読んでいくと、あらためてこの「制度廃止」という会社の出方が、「いかに暴挙なのか」「いかに合理性に欠けたものなのか」がよくわかります。「釈然としないけれど、会社が決めたことだから仕方がない」と自ら代理店へ転進して行った方々の「釈然としない理由」がしっかりと書き込まれています。10月7日以降、言葉ではうまく表現できなかったモヤモヤとしたものが言葉になってまとめられています。そして、私たちが素朴に感じた疑問について、法的根拠をもとにしっかりと論証されています。私たちが素朴に感じた疑問は決して間違っていなかったと確信できます。裁判の結果は別にして、会社の「制度廃止」という攻撃・出方が、法的な見地からみた時に、「どういうことなのか」を論証できたことは、私たち企業に働くものにとって大きな一歩であったことは間違いありません。私たちが裁判に訴えなければ、こういった法的な論証も行なわれず、ただ経営の思い描くシナリオ通りの結果が待っていたかと思うとゾッとします。

ちょうどこのたたかいは、病名が告知され、その病名や病院の対応、治療方法に疑問を持った患者と家族が、セカンドオピニオンを求めて別の病院に診断してもらったところ、患者や家族が持った疑問が的中したという状況に似てはいないでしょうか。信頼してかかった病院が下した判断なのだから、疑問を感じても仕方がないとして、甘んじて最初にかかった病院の診断を選んだ方たちは、代理店に転進して、いま「代理店としてどう生きていくか」を必死に考えています。私たちは「セカンドオピニオン」の大切さを理解し、最初の病院の診断とセカンドオピニオンとどちらが信頼できるかを考えた上で、セカンドオピニオンを選択し、この地位確認訴訟を必死にたたかっています。一概にどちらがどうとは言えませんが、セカンドオピニオンを見て、どの道を取るか自らの意思で選択できたことは「ゆたかな人生」だったと思います。

契約係社員でいたかったにもかかわらず、それがかなえられないとする理由・根拠がいかに脆弱で、いかに経営の独りよがりのものなのかを、この最終準備書面を通して再認識します。情報とは決して一方向だけに偏って取ってはいけないと痛感します。そしてその経験は「教訓」として、私たちこの訴訟をたたかうすべてのものの胸に深く刻まれました。